



中村俊定文庫
文庫 18
337



夏
炉
一
路

完

副書

海を舟に 為し舟を舟に 舟を舟に
其れ地を止る舟を舟に 舟を舟に
舟を舟に 舟を舟に 舟を舟に
舟を舟に 舟を舟に 舟を舟に
舟を舟に 舟を舟に 舟を舟に

うねねみふあやまをま集
うねねみふあやまをま集
うねねみふあやまをま集
うねねみふあやまをま集
うねねみふあやまをま集
うねねみふあやまをま集
うねねみふあやまをま集
うねねみふあやまをま集

佐度正事、あ

卯月十八

魯卿格
正卿格

蘭麦
百斗
深美
あ水
徐母

四時花鳥
 梅片や紅敷を仙蹤に朽那々
 ぬきこゝにのる波歌阿里杜那
 初にや腹に好意くきぬき季
 千々帰く邪結を係やが長堤
 木柳花を所



四時



鳴る

青柳や軒の栗を足して見る	楚議
宵の洞の雲に生れて杜宇	百牛
夜嵐に弓流ある葉山子哉	豆花
風鈴の鳴ほとつゝの涼か奈	蓮徳
中空にふとり働く雲雀かふ	百之
鵲は踏るゝ年の役目かふ	朱道

二

風も又睡へこぼさす菊の露	奥来
春雨やよしの、雲の一えほり	浮翠
鶯も思ふ足遣ひあり杜若	玉珂
是は貢く外そ門田の青瓦	枝栖
日に口にくまれ夜るの桐の花	長笛
又一重伊勢の上や雲の帯	葵子
鵲の巣喰ふもえり冬籠	桃陰
引船の笠より歌く菖蒲水	笛臺
風散て空にえりや花雪の花	如潭

(大東京文具チエーン特製)

ニツ三ツ壁あり星の夜寒哉	君頼
川上へ流るゝ火あり涼おね	奥明
萬に垣根の雪は春水りり	素風
富士浅間ひとつに荷お霞かふ	智丸
花に起さ風に追るゝ胡蝶哉	桃壙
人の目も誘ひ出したる木の芽ち	琴江
若草に雪を忘けり波の色	桃里
我庭を往来に潜る柳かふ	山泉
山字を追いたりけり蟬の声	山輝

端
一
十
也
扇
志
め
つ
一
星
月
夜

梅
葉

川
一
ワ
他
玉
へ
下
子
雪
石
加
な

素文

白
雨
や
鹽
の
足
ゑ
所
は
つ
れ

翠石

夕顔
や藁
打
杵
の
こ
丸
裸

字
洪

蒼 か
う 鐘
に 馴
染
や
山
樸

良
谷

清水
や
月
の
か
さ
は
る
を
郭
公

振鷺

物陰へ
結了來
る暑
かな

有
隣

涼いさや笥見透す竹の奥

朱
珠

白
奥
は
黒
十
も
の
か
ハ
梅
の
花

廿八

(大東京文具チェーン特製)

10—20

入梅や雲ほころひと月の顔

又
醉

夕立や
葉未
に残
る
月
の
照

佳雪

山ゝの花もあさる
汐干割

山花

聖林
ひにけふを聖夜
の祈音哉

鬼
淚

水
ろ
り
の
水
に
曇
還
く
雲
哉

美
奧

橋
字
は
粒
と
た
の
む
柳
の
な

調字

淋
え
へ
ろ
ん
の
積
了
習
見
哉

楊柳

瓜
紅
毛
貝
一
字
一
二
沙
干
哉

青牛

若竹の陰の
 くのり
 畧
 か
 存

拾翠

手を引た子故の園の蜜かな	桂洲
初雪や道／＼おしお黒木賣	碓花
星をえる顔にまき／＼涼哉	青芥
初蚊屋や一夜二夜を雲の帯	石漱
あゝ雨に埋む河もな／＼飛ぶ雲	紗管
寝せ起し我にそむけん井婦人	膳水
鶏頭 頭 や西念うせと借家札	涼風
筋塚や目の届くまで若なつゝ	潤二

(大東家文具チエーン特製)

梅か香にすれ遠ふたり丸木橋	一鳥
散はこを箒に重き橋かふ	巨峯
／＼か夜や鐘に追ふ／＼月の形	魯郷
乙鳥や一矢射付て須戸吹石	炉崎
短夜や夢をハしあす撞機守	傾馬
夕立や泣に生る／＼泣路島	左柳
涼／＼や車にあける水の音	吐鳳
畠踏て空へ遊た／＼雪花	馬明
若竹や籬折曲る鹿の主	坐隱

四ノ

振列

又初音あかしのうや郭公

池田 亀龍

葎の葉を漕あうく雪かな

中村 野籾

葎の花に申あまや懐子

桑津 管籥

繪に書し城もあさかた

名来 其雷

葎土は水掉こまねく電氣

有馬 車嶽

一聲に夜を忘れけりあまさん

蛸尾

泉州

白雨に酒はわすれ水室守

左馬 南河

横雲を梯に登る雲霞哉

草部 其友

(大東家文具チエーン特製)

徒然のうさをはうや田桂吹

小方 市中

飛不星を散る花に足て涼哉

府中 玉羽

連に目をのせてあて涼引

嵐市

御垣守暮て行く間を涼引

鶏口

和州

あをあげは日のうき花盛

南部 了阿

川骨の流るはかりに暑かな

長尾 馬來

高坪の雲より餘雨や残雪

長尾 車額

紫荊を雲に隔つやあまさん

庭香

毛氈の色を奪やあまさん

蛇水

暑日は珠とくも欠たり心太	子 ^あ を ^あ 流 ^あ ふ ^あ 力 ^あ や ^あ 其 ^あ 清 ^あ 水 ^あ	夕 ^あ 立 ^あ や ^あ 是 ^あ も ^あ 俗 ^あ 生 ^あ の ^あ 影 ^あ の ^あ 縁 ^あ	飛 ^あ 蝶 ^あ や ^あ 隣 ^あ の ^あ 春 ^あ へ ^あ 立 ^あ 通 ^あ り	釣 ^あ 子 ^あ の ^あ 械 ^あ に ^あ も ^あ 有 ^あ り ^あ て ^あ 柳 ^あ か ^あ な	三 ^あ 日 ^あ 月 ^あ の ^あ 弓 ^あ 引 ^あ め ^あ ん ^あ や ^あ 舞 ^あ 雲 ^あ 花 ^あ	蟬 ^あ 鳴 ^あ や ^あ 空 ^あ て ^あ ハ ^あ る ^あ ぬ ^あ 雨 ^あ の ^あ を ^あ と	暑 ^あ き ^あ 日 ^あ を ^あ 風 ^あ 縁 ^あ け ^あ 通 ^あ す ^あ や ^あ 蟬 ^あ の ^あ 声 ^あ	家 ^あ つ ^あ と ^あ に ^あ 風 ^あ を ^あ か ^あ た ^あ け ^あ し ^あ 柳 ^あ か ^あ な	白 ^あ 雨 ^あ や ^あ か ^あ く ^あ し ^あ 山 ^あ を ^あ 置 ^あ て ^あ 行 ^あ
家 ^あ 留 ^あ	祐 ^あ 之 ^あ	鳥 ^あ 孤 ^あ うい	章 ^あ 甫 ^あ	友 ^あ 志 ^あ	了 ^あ 山 ^あ	布 ^あ 雪 ^あ	菜 ^あ 雨 ^あ	五 ^あ 明 ^あ	富 ^あ 水 ^あ

(大東草堂具チエーン特製)

竹の子の立は親に習けり	松陰を相傘にして夕涼	竹の子や散らねハ風に答はなし	泉水の奥は酔けり五月雨	夕顔や伸て隣の花盛	夕立や連に別るゝ森の陰	まつすくに柳の眠る暑サかな	虫かな空にしうれぬ草の照	産綿ふ川も奥ある虫かな
民口	泉石	桃李	眉山	大鷲	二子 竹子	望雨	友枝	蝦目

橋州

二子

大久保

打水の端に飛かふ雲かな

夏扇

橋越えて三人笑ふ涼かな

仙龍

青苔に道一筋の清水引

梅水

作列

涼しさを我影遊子掛鏡

一之

若叶や雲の朝日を置直し

至涼

信列

散雲の跡をかりて船路のとなほ引

柳曉

望の端をかりて船路のとなほ引

柳曉

越前

(大東原文具チエーン特製)

昼かゝの細工に早し雲の峯

鶴江

先笑ふ嘶し初めや梅の軒

吳江

羽列

山蜂に人も馴たり花さかり

最上

紅島ハ朝日の末もつま小けり

甘花

石山の石も見透す雲かな

龍庭

讃列

あさし雲は空へも遠き雲在哉

是梅

恐ろしき鎌にもよけぬかゝり引

周雨

天の戸もこちから起す葦哉

普山

先春のあたへと得たり金衣鳥

黒崎市列

梅が香やとの透同のう枕もと

嶋田雨芳

三列

方圓の器に習ふ氷かな

市坂山光

庵列

朝顔は伽藍一炷のさかり

佐々山吟

短檠の油火鳴りて夜寒

寄潮

勢川

(大東京文具チエーン特製)

大印に風か拭ふやけふの月

松坂

吳扇

水賣の荷の替りり今秋の秋

豊島

五蓬

日の文をくらへて見せし柳かな

金剛坂

素流

相州

三崎

眞や杖かうつりし雪の道

市明

下總

ぬりもせぬ杭にゆらるゝ蛙かな

栗橋

素人

基基に遊ふ眉毛は白し桃の陰

濱

鳥歌

草を束ね松に起たる野分

鈍子

弄船

牛にさへ負ふ歩ゝや若菜つゝ

八百市

烟水

立時のけりありあり組子の声
遠眼鏡雪にハありす山さくら
春郊チヨウ

上総

真や藪に寒さを置て出る
鳥トビ風カゼ

五月雨やますく白き磯の鷗
鳥トビ舟フネ

初雪や今朝かう讀了鳥の跡
芝蘭セラン

ゆるかして風はおとろく柳哉
雨アメ林ハヤシ

青柳や風ハ分るゝ水と波
林鳥ハヤシ

新影法師の望川に長し梅の花
巨栢キョウハク

上州

(大東家文具チエーン特製)

鶯や谷へ見に行く人の声
海鳥ウミトリ

梅か香や跡へも遠き后の道
奥文オクミ

明うかに踏迷たりけふの雪
巴江サエ

武州

眼鏡には若い日もあり菊の花
古コ田タ

髪水にゐる香もあり
書橋ショキョウ

鈍子かう白ひ初てや菊のけふ
瓜ウリ風カゼ

四阿に夜さのありしや麻の声
是布コノハ

一重つゝ声消えなす雪花哉
外浪ソノナミ

山一つこちうに足さ霞かふ
伏フス亀カメ

和 牧

長
47

普
新

江都

格
重

童牛

如
林

匠
釣
シ
ナ
ウ

花溪

(大東京文具チェーン特製)

賀

夕
語

葫芦
月公

魚
廟

柏子

桐
雨

山民
寫

鼠
麦

百卉

(大東京文具チェーン特製)

京部

10—20

まさうんと秋のあはれをゆかきみたまふけた
 了事もなく杖突きゝに天下茶心の荒蕪を慰め
 てかへさの事にや浄智禪林のほとりなす祖翁
 の古塚に拝謁せしと聞へしはいかなる因縁ぞ
 せや思ふに凡とはたり雅をこまやかにし文筆
 におかしくまじはり閑林に嘯てわたくしなす
 眞実を三神も憐し愛しむちひきせさ勢給ふ
 にや家隆卿の入目を拝み玉ふ蹴突りも唯鏡に
 影うつり山考答ふ心の誠にえ有ぬし足花庵
 主か眞意仰へし羨むしと大坂飛脚へ長言傳

を頼に送るものなり

編綴の蝶に道あり塚の秋

飛州

老梅

しき

下駄かりあはれに用あり若菜摘

駿州

翠堂

右二君は

柳芝の愛弟にー我か爲に道の見え
しはうく

命によつて死は位山の良枝をえうん琴

君は太井河の水を仇め給ふ儂の身は根を

離たる草の大江の嶺によとむに似たり、

をりく 西は遠く品字に居るといへる

(大東家文具チエーン特製)

こゝろは咫尺の近きに花津、一の絶半に
はあふすす便の絶するをたのしむる

芳聖紀行

百明房著

花さかりを趣向にー旅から旅なかり替にまか

せささうさ末の一日首途す 祖道吟

題 竹三

祖道吟のわかれ
あはれ

花、ゆく衆書せはや 望の東 百牛

蝶、ふらふに纏ひん 何処迄も 持談

美しき金にもたれき 花の雪 豆花

紀行一才

梅雪月も和らけ花の旅

蓮花

得杖一字

引杖にいななひく——春の草

奥来

蝶の輪に習ふて花小枝の跡

枇杷

長閑さや腮に杖突く後の影

如潭

行杖や廣い海山雲霞

素凡

長き日花の時杖の三尺夜

良君

巾の杖花にけきる途引

枇杷

道くや杖の藁の芽生し時

左柳

(大東家文具チエーン特製)

蒲公やいはしとまりて杖の花

智丸

ほめてやる杖もあたらう！初極

宇浩

ささうけの杖もゆるあや日の歩い

傾鳥

花足んとしてすのいかた（まかりける人）
あまのはなあけすこと讀み送りける

花の色にうつりゆくとも旅衣

たちもとまうてはや歸り人

知休
しよ

寄老鳥

道の記の折よし茎土筆

琴江

駒鳥も鈴に送るや膝栗毛

山泉

行足にとりひく——鬼薮

山蟬

大和梅邊に伴ひつれて柳を縮め	志は らく の名残なかりさすかに信友の人く	戻るまゝ目はやすませし風巾	折ふ し 世波に乗りあはせし	山へ入る月や霞の後につき	朝東風や梅衣 の 袖へ入へ行	題 凡月 通 作州花教	聲遠く友とわけひく鶴哉	我は又縮手変りし糸摺	行の 雁をーはーの連や鳳巾
			羽州最上	至涼	一之		素文	翠谷	梅葉

(大東家文具チエーン特製)

やとりし廿二日午鶏を用て跪尾村北邑氏の許	其夜は左界にしたし其義白 亮 仙の杏林に初	呼ふ聲のこちうは淋し 子 の羽	留別 さうはて遠くや木の下に	登るけと方さこいりや花の山	さうはーこ水をやりふの啼子鳥	行水に志るし柳のあそひけり	白ふ雪先くにあつ彌生哉	陽炎や見おくる足も浮て立つ	句ふ雪先くにあつ彌生哉
				馬明	吐鳳	炉峰	魯卿	玄岨	魯卿

にやすらひ園中の奇樹奇石に慰み家原の文珠
 園に鰻口の緒をいたし利根草の芽出しを愛
 して法果の一句を柱に題し空り阿闍梨に押韻
 して風説に時を移す紅輪かたむく頃八田寺村
 柳氏の家をありとす行基菩薩の誕生水を見
 せんとえこの澤邊にともなひ水て古井あり春
 草生之かりりて十歳の久しきを見れハ蛙子の
 生れありけり和泉式所の社に詣ぬ爰こそ神の
 臥處よと慈愛の老梅に戯れつゝ草部の杖長其
 友子か門に笠を脱く古き住居の軒の松は泉を

もかくすく枝々に作る鳥の巢は丘隅にと
 ます巢か分別を覺たり又其友子柳氏と共に泉
 州の一寛大鳥の社に行脚の無事を祈念し向上
 庵に登て千りう鉛をのれか口のさし出て難水
 たくと人に語る友とよみし一路居士か古器を
 見れば居士は一体和るの法弟にして生涯徳を
 かくせし僧也とえ座禪の處あり香樹松あり船
 尾村物種氏何れか留主の戸を音信て老母か
 新髪のもてありを承れ取石の池に春水の渺
 りたるを望み新葉果に入水水鳥は蛙に聞か

之て候た聖明神に柏千を打ツ
 蜘蛛の巣やいたう甘き千枝の陰
 葛の芽にしよううおもとを尋なかりこの森を凡
 五十餘町わけ入り(サカ)林山の大和尚に参禪して
 春草や一筋野狐の通ひ路
 留秋の奥野氏の玄冥に草鞋を解てくゝり枕の
 あしらひよし高師の漬に立て身をほしいまゝ
 に遊ひ海苔取の戀する沖の高石を匂にゝて府
 中の玉羽子か風窓窓に入り四五本の竹に青眼の
 交す嵐巾子へ招かれ鶴に子玉羽子ととも千

金の骨を更し幽峨子か花の園に既陀掛の木を
 も得たりせ七日深井の御外山氏を尋ぬ庭の一
 隅に八行基茶自穿たる清泉ありけ井をもて村
 の名に呼とる諸病を治する杭化の奇縁に流鶯
 涯のききとありて寄せ侍るせ九り昔々の御酒
 天神に話す折から法花経講誦の祈禱ありて修
 徒あまた並座たり信義の桃は林の如し
 神鏡もけ子は機嫌や桃の酔
 蒲合の睡道をふゝあり花白村の巴流子か凡麻
 を敲き歸路を踏して立出上太子の中廟金洞

の智炬と昼の臙に押ミ竹内峠小枝をたひめて
 や、斜影うすき吹長尾の葛城禪局に至るあり
 し夜稿隱士ハ風雅にふるき因ありはこゝろ故
 園に遊ぶに似て日教といふる某の花や赫奕と
 して寺にひとつと柳居法師の遺章をおもひ出す
 眼前吟
 某の花や朝りを来り某郡
 某の花や鳥居一つは染珠し
 夜稿
 當麻寺まゐり
 極樂はいつくといひ、大和なると中將姫の教

(大東家文具チエーン特製)

まりこの里ハ祖翁旧遊の地にして其詞書に
 ニ上山當廣寺に詣て庭上の松を足ふに凡そ
 とせし経たるなうん大サ牛麁かくすともい
 ふ、けむりハ非情といへども佛縁にふか
 たる處幸に尊し
 僧朝顔いく死か一法の松
 その松のなつかしくを伴ひて杖引を
 し蛙歩して禪前を足小はりの松ハ往し年鼠の
 為に吹たをさめて一つの株のこ残り誠や海
 世にあるもの、死を遁さるを足て跡さるに不

退の浄土ニそねはしく侍れ
 堂上喧
 糸遊ふや庭掃く尼の手も揃ひ鳥酔
 糸へるや柳にて鳥の徒戻り
 社橋
 袂松はひやり山より袂に入来りいつめ姫の
 施しものにして又来迎松とよいわ
 庭香
 舞ふ蝶の袂や松に振あひて
 念佛院にハ沸⁺粧ありん今を盛なるを乞ふハ
 目馴れたる紅井を吞つて殊勝に乞ゆ
 交機持能
 音也社の明神をぬめつく傍にあり一節木ハ其

時の機のはしとあんなみりもあんなあす不朽の
 あんみ也
 望や舊の桜も法の縁
 東韻
 大師堂金堂戸塔を之て奥の院に置水ハ猶も深
 く洞へて銀の外さうに音^{する}あやむをの
 へかうこゝろを^分けぬ石の鏡といふハ圓光大
 師影を移さ也給ふ天下一の宝石なりけり
 尊さや石に比うつ月花の影
 富水
 春草を踏へる尾山に登り染寺に下る
 染井あ
 リ

佐保姫や古井の水は染珠一
 鳥酔
 京掛様染跡有といふ所を久あうさや、餘光二
 上ヶ嶽にさしあゝりて紫の雪と添ふさま、か
 の山越一の聖象来迎に髻髻として處り、猶尊
 し
 一祖翁真蹟 牛内村 明石隨庵所持
 隨庵は 玄隨か孫也
 〇良醫玄隨子ハ玄度眈を折て家を醫し国を醫
 す其疾を名付て一枝軒といふ是彼桂林の一枝
 の花にもあらず微笑一枝の花にも寄らず南花

(大東家文具チエーン特製)

真人の謂所一菓一枝の樂ミ偃菴か腹を和て無
 何有の御に遊ハ愚者の邪熱をさす 僻智小見
 の病を治せん事を願ふなり
 世に白ハ様花一枝のミをさし
 蕉散人 桃青社中
 一同 長尾村 吉川氏東籬所持
 車籠ハ口損庵千雪の孫也
 〇大和国長尾の里と云處ハさうりに都達さに
 あゝ山はなう山に似たりあるし 心有る
 にこをぬる母の板おけけるを其家のかたへ

にしつゝ庭前に本草のあかし氣な日を植置
 こ花屋めつゝかにしす急なし午つかう枝をたは
 め石を撫ては此山蓬萊の嶋ともなり福生薬と
 リらんよと表女につめく慰めあんとせし実有
 けり家食しと孝子あゝいんとこに聞存小食し
 ありんしと孝を尽す古人も難事にあゝいけ
 3
 冬 ちりぬ宿やもけす言あゝい
 芭蕉庵枕書中
 左一軸ハ此春江都之白水子へ譲ぬ
 (大東家文具チエーン特製)

枕

四寸五分

おきか片

無天に

言を

看る何ん

文を

川ハ目如

子もふはれ枕もぬるもき

其角

東に離河持

裏ノ穴

一相委、又に塗ゆ、(毒) 毒紙也

名張ふ十何り、(我) 九ツはた

通う、心此自、(けさ) 何り、子

文通て、乞求め、(けさ) せ

新米や茶粥喰ふ ^ニ 高きくら	裏 ^ニ 古人坐ふ臥臥伸ふ足依枕	又換居士	月之夜も花にも同じ高枕	川音や枕はつれ佐夜時雨	寝て見よと懸入て出ず籠枕	今夜に寝て枕の神も有難	五月雨やぬをぬし渡る枕もと	邯鄲の枕も花の根の曲り	松の音枕も相争冬こもり
千李 ^ニ			李下	李り	う ^ニ 角	今詞	浮世	桃隣	杉風

(大東家文具チエーン特製)

日損庵ハ市内峠の下民家左の裏にあり	見渡す處東 ^ニ 三ツ山高取城多武峠宇多山小	の笠の間にハニ上嶽竜田法隆寺達戸寺達	見ると民家の中に在て隈閑の居なり	甲子吟行に	畢 ^{やま} と ^ま の ^ま に行脚して葛下の郡竹の内とい	ふ所にいたるにふ所は例のちりか旧里な小	は日吹とまり足をやすむ
一千李ハ	日損庵又換居士	行年七十ニ終命當丑 ^ニ 四十二年也					

数より要にあり
 綿ろやひはにちくさむ竹の奥
 旅寓の店にいて類も短尺も皆翁の真蹟なり
 とそ東雛子にともなひて遊ぶ
 荏さへ巢に倦く時や竹の奥 鳥醉
 花ちれとむのしの色や竹の奥 東雛
 眞に隣合たり 竹の奥 夜橋
 一長尾村に齡八十二になつ小助といへるをの
 こありけ老人は翁行脚の事を言ふたすれ相逢
 乙彼是の事共を聞く中に口大勢打寄 物語の折

から何といふ事かち出けんもしうす。地獄の
 一日一夜ハ人間の一年也とある僧の言を小助
 聞てそれても飯は三度にて候やといふに翁も
 大笑せりけりとなり

旅寝のかたみに当季の
 百章をのこすしと人々に
 といふなかさいて破れたる壁の
 ところくを書き置ぬ

初空やよろこぶ雲の置度
 初風や我れ垣も民の敷

梅か香に春定りぬ庵の窓
 梅咲やまた前遣は雪の筈
 勅刺になくはこの木や梅の花
 釣念ぬ宮所なしあめの花
 梅か香や午に休いて来る枝し綱
 梅か香や機巻く息を寄せて行
 梅咲や銀井ハ解て尾長鳥
 問るしも疎き隠れ者や梅の花
 梅咲や筈に音を奏出す細流れ
 紅梅や雪の跡かうあふなむの

淡雪や鳥の音疎き井の奥
 鶯の一息かけて枝の雪
 うくひすや垣ハ古ひー建仁寺
 鶯や諸くの鳥の花のもと
 鶯の枝踏直す初音かな
 鶯や四海の朝を呼掛ひ
 武我輩は土さへ鉄の若菜代
 若菜世や輪にして戻る雪の跡
 若菜世や小所の果も杖で出る
 孝行の雪を又掘るわかなかな

降雪になをしく——猫の恋
 今の世に下手な仕方や猫の恋
 朧月五位は一聲咽て飛
 大佛の眠るものなり朧月
 うつあけな水糸——朧月
 鳳巾しつこいろなく暮^て身^行
 十美の家は飼れど鳳巾
 和うあふ風喰ふ鳥か鳳巾
 如雲路の山に静に霞かな
 汐波の香籠る、霞哉

十四

(大東家文具チエーン特製)

田も家も中の模様や薄霞
 落る日を朝へ返して霞かな
 泉中に焚ぬ家あり夕霞
 春の野や牛青々と明離れ
 初午や杉菜の中に作り路
 初午や玲瓏として白豆腐
 初午や鶏頭驚かぬ朝朗
 初午や杉の曙巷の前
 涅槃會や西行ひとり死課せ
 面白く夢見ふ顔や涅槃像

十五

牛は淵を牽出さずにはねえ
 三月のぬけて落たる柳のふ
 青柳や風の手に定めかね
 青柳や三百丈の滝の裾
 青柳や裾にかうまる鳩の聲
 乙鳥に門立したる柳かふ
 たよ／＼と田舎に並ぶ柳哉
 行雁や反古にし置く麦畠
 飛ぶ顔に分別之ぬ蛙かな
 遠浅は明て知れたり鳴蛙

しきり

(大東文典子エーノ特製)

野の淵の水を聞出す蛙かな
 油断して蝶取返す蕨かな
 第一の日和ものなり舞雪在
 一翫て一春くらす雪在哉
 雲に聲しみて暮たひけり哉
 野の蝶や小松の難所越て行
 野の蝶や積らぬもの、降くら
 植の葉の昼間も淋し春の雨
 菜の花や鳥ある里ハ蝶も有
 蛙子鳴や庚申塚に明る末て

しきり

雛子の顔かくれぬ草に初音哉
 雛子の聲をのが住室に餘りけり
 鐘の乳の音を忘れぬ乙鳥引
 雛棚や昔ありけり女顔
 仲人の假に足せり雛の息
 この家の棚蝶丸独り遊びけり
 いまの日や猫と女と乃あり膳
 鉄つかい老せぬ人や桃の陰
 磯杵も只の風吹く汐干哉
 約束の縄も入らずに汐干かな

しなう

梅臺の煙管で吹ん汐干狩
 踏出した石は礫や汐干狩
 足踏の音を尋る汐干哉
 葦表から浮輪に足たり汐干狩
 咲日さへ暦をくや山極
 山鳩の居住ぬもよ一花の枝
 波音に山も動くや散る極
 世を逝た人も狩る極かな
 品玉に茶屋も汲けり花盛
 山彦の鴉鵂も遊ぶ極哉

しなう

乞食さへ日延の欲や花さかり
 山字は指印^切の心刀や花さかり
 似たものに似た句のな花さかり
 曲突もたぬとなうはや山極
 蜂の巣や鐘に並つる釣加減
 鳥さしや尾長に迷ふ藤の花
 藤棚や池に一時助銀河
 藤棚や海士か昼寝も波り下
 藤棚や下行く日は結けり
 俳の夢さへ落る椿かふ

(大東家文具チエーン特製)

戸をかくす神代にあはて田螺哉
 女夫して麻ふみ分るつゝし哉
 山吹や飼ねぬ牛も水鏡
 紫の雪に寝て足すすみみ
 長閑さや鷺の眼を窓へ取
 乙鳥をやりこぼしたる蜩とり
 行春や目は梢から下りて来

右春百章

鳥酔

葛城禪居山旅寓書

レ十八

レ十八

登

去野山

夜橋房

百明房

六田の柳に目を拭ひ四年の社頭に二もとの櫻
を初と一と十歩を左に向き十歩を右に向て攀
のほれハ雲の中行く人にも似たれとさすかに
老の足もと弱く息短し折かゝ百牛君の銭あり
し一壺の梅醬こそ此即梅酢の謀なれと懐中よ
り取出して力を得たり
詩歌連俳の句く ~~校~~ 校もたハむ何とに引裂紙を
もて結ひつりて見しを心の土産にする詞客の

しナナナ

(大東家文具チエーン特製)

こゝろをりく同し山に短尺賣うんと芝師
の吟はかゝる花盛の眼前己討友のかねてたの
めりまゝにわへとも持来り梅の苗の尺はか
りなるとあまた求め土かはせて一本ツ、~~の~~あ
しとなすのむかし誰かゝる櫻のたねをうて
芳野を春の山となしけりをうりやみた~~の~~ハ山
中に薪を帶たくりハあうし行程の建石三十
をかそえつ、一目千本の鮮くたる梅の裏を
詠め又豊玉のほろひありし茶底に腰かけハ
妍くたる梅の裏を足りけしき似たものに似

た句いなし
藏王閣上にかしこまりて金網丈六の戸帳をひ
らけはかつと身にしみ校りて春をわする十と
せあずりのささ西窓の初秋なかに長花房を伴
ひ信走童と(車)たつや我は梅に逆の春の無念な
りしよりひたすらなつかりく受之侍るわこと
しりのけふの盛に来りあふハ生涯のよろこひ
年月ねかへるまこととを山神の恵に結へるを海
し奉りて一章をさし侍る
古水祇苑よりふかりさけふは世尊寺の龍極に

(大東京文具チエーン特製)

嘆つゝけと皓くと銀河の裾をうつす是ツ
とはかりの姿はけ處なる一されと傍なる人
のいふはさし是えぬ庭中に勇將の跡(跡)忠臣
力の釘見るもいとおそろし心をあたらめ
後醍醐帝のみさしさを抑す甫然たる落(落)花の香
羞芳くと露に酔へる蝶蛙の聲のこ尺五し奉る
よしや君あかしの傍に涙をもよほして人
恐入ぬ嘆のみか散るも勝午の御鏡みハ静か顔
を握り(握)宮坂の木の下陰は寒かうす仰向
金精のみやしう上久たるとぬかつき寺傳に案

内せうれと蹴板の塔にくたさるる芳野なる深山
 の奥のかくれ塔本東空のすみか也けりと行者
 者をのぞきしつゝてみたひめく了法式に僧
 曰をといは行者穢穢の塔といへるをを小
 後は蹴ぬけの石に呼かえたり又曰塔の内四面
 の板に丹青なる曼陀羅の画ハ狩野古法眼の筆
 にしてそのうち誰やうか再興せしといへる力
 甚名は忘れかたに増結ハ廻り置るハ忠信か
 鑑掛極とかやおれいかた朽て弥生を表しん葛
 海鮮の廓に咽をうるほし途か岩を眺望すれは夏

箕川の岸を松栢の白妙より官軍の背を逆にあ
 り進へる岩をありハ大塔寛の玉座ありし興院
 を行進す彼といひ是と云ひ歌書よりハ軍書に
 かたしき事多をかしし
 百歩ありを經て四方正面の佛室あり四尊を
 安置して面走不替の法の珠とてあつた
 免座を傳ひてとくの清水にもしはしとて
 こそを為うつ小もの昔は色を改す岩同の衆心
 細く又心清し伯夷ありハ口をすゝみん許由に
 兼は耳をありいんと祇蘇の詞を奇なりとて

汲み干す屋ともあさ庵床しく沃蟹の歩に習ひ
 じりくく隅田の奥院に至り鎌入ぬ茅すき
 ハ者多のまゝに深く斧つかにぬ杉檜の枝を交
 じ暗し和泉玉に名ある似雲といへる素門こゝ
 に住てよみ歌の遠近^多用^今行^今と人稱しけりか
 往し年の秋山をくたりて後寂す形身の一口炒
 はいまた残るは法師も又なつかし我もたは
 この^む同の世すん人と腕を曲て愛するものハ
 只白雪のく山中吟二章

しの山花に埋冬幾つ
 夜橋

(大東草文具チエーン特製)

しの山花の木の間の花之哉
 石明

しきり

昭和十三年八月習字

(大東京文具店ニールン特製)

白字

宝曆元年七月

京都

井筒屋麦郷子

大坂

北邑屋西巻子

江都

丹波屋玉寄子

近江屋一湖子

書肆

了世子

白字

85

Handwritten text in a cursive script, likely a ledger or account book. The text is arranged in several columns and rows, with some entries appearing to be dates or numerical values. The script is difficult to decipher due to its cursive nature and fading.

